本田　彰 日本学校図書館学会県支部長

教育改革 核心を問う

主体的学びもたらす場

学校図書館の機能を解説する本田彰日本学校図書館学会県支部長
＝5月上旬、静岡市内

教育における学校図書館の役割について、元校長で現場の取り組みに詳しい日本学校図書館学会の本田彰県支部長（同学会理事、静岡文化芸術大非常勤講師）に聞いた。

―学校図書館で得られる学びとは。

「まず低学年で図書の分類を知ることから始め、事象に興味を持った時、どこに行けば関連の本があるか理解する。そこには同テーマの本がいくつもあり、数冊読めば書き方が本によって少し違うことに気付くだろう。それらを比較し、まとめる時に出典を記しつつ、本とは区別して『自分の考え』を表現することが大切だ。図や文の読み取り、表現なども含めると、一連の作業は多様な教科の学びが絡み合う。図書館ならではの学びの魅力だ」

ポイント

本比べ「自分の考え」に
読書の拠点へ創意工夫
校長の熱意が機運左右

―富士川第一小や静岡市の取り組みの評価は。

「教科横断的な学びができる学校図書館のメリットを意識して教育課程に位置付けた。司書教諭が自由に動ける時間を確保して3人体制で授業をしていることは、スキルの伝承の視点からも理想的だ。先駆けて学校図書館支援室を設置している自治体がある中で、静岡市は教員の研修施設である教育センター内に置いたことで直に学校支援をできる」

―学校図書館の環境改善の歴史は。

「1953年施行の学校図書館法の当初案は各校に専任の司書教諭を置く先進的な構想だったが、猶予規定によって40年以上実現しなかった。97年の法改正が転機で、本県では東中西にモデル校を作って司書教諭を配置するなど普及に努めたほか、積極的な市は学校司書の採用を始めた。授業利用の機運が一気に高まり、現在まで緩やかに上昇し続けている、と推測する」

―子どもと本の出会いをどう演出するかも重要視されている。

「読書の拠点とするため、自分の在職時は児童を引き込む本の紹介を目指して新刊の表紙を見せたり、室内装飾にこだわったりした。同じ物語の本が多く集まる楽しさを感じてもらうため『ごんぎつね』の4冊の最後の挿絵を見比べ、悲しみを的確に表している1枚を選ぶ授業を行ったことも。学校図書館はまさに主体的、対話的な学びをもたらす場。人的体制や授業に向けた資料集めや更新も含めて、利活用は学校図書館長である校長の熱意にかかっている」

静岡新聞

© 静岡新聞社　無断複製転載を禁じます